

アウグスティヌス「三位一体論」の *imago Dei* の解釈(1)

小 浜 普 信

(1) はたらき Operatione には二種が区別される。

一は、はたらく者のうちに止まるもの、他は、はたらく者から外へ出るものである。神に於てもこの二種のはたらきが見られる。一が神の内への発出であり、他が神の外への発出即ち創造である。(2)では神の内への発出とは如何なるものか。御父 Pater なる神が即自 An sich として、御子 Filius なる神として外化し対自 Für sich となり、この両者から聖霊 Spiritus Sanctus なる神が発出しこれが両者を結合して、ここに即且対自 An und Für sich としての三位一体なる神 Deus Trinitas 即ち一にして三、三にして一なる唯一神が現出する。しかしここに早くも異論が提出されよう。一なる神が如何にして三であるのか。逆に、三なるものが如何にして一であるのか。事実、この難問に苦慮したアリウス派は、結局三者は実体的区別即ち存在上の区別であり、而も神は単一的なものではないから、御父のみを神であると見做すという異端に陥り、逆にサベリウス派は、三者を単に概念上の区別に過ぎないとする異端に陥った。この両異端に陥ることなく如何にして三位一体なる神の内的発出を説明し得るであろうか。

アリウス派の異論は次のようなものである。神に就て述べられることはすべて実体的に secundum substantiam であるとする、三位一体なる神に於て御父は〈生れぬ者〉Ingenitus 御子は〈生れた者〉Genitus と夫々実体的に言われることになるであろう。然るに〈生れる者〉〈生れた者〉という規定は異なるものであるから、御父と御子そしてこの両者から発出する聖霊、これら三者は実体的に区別され三神が区別されねばならぬだろうが、これは不都合である。この異論に対してアウグスティヌスは次のように答える。神に於ては何ものも偶々起る accidere というようなことはない。しかしそれだからといって神に就て言われることの必ずしもすべてが実体的に言われるのではない。〈御父——御子〉のように関係的に secundum relativum 言われるものもあり、而も御父はつねに御父であり御子はつねに御子であるから、この関係は偶々生じたものではない。従って御父・御子、そしてこの両者から発出する聖霊は、夫々関係という観点から区別されその意味で実在的区別 distinctio realis をもち、而もこの区別は実体的区別ではないから三者は実体的に同一のものである。アリウス派の異論と同時にサベリウス派の異論もこうして論破される。(3)

このような三位一体なる神によって万物は創造される。果は因を多様な仕方て反映するから、被造物のうちには三位一体なる神の様々の類像 similitudo が見い出される。「三位一体論」以前にも外的被造物中の様々の類像が論じられる。(4)しかしプロティノスによって〈外から内へ〉

という内面の道を触発されたアウグスティヌスは、一転して＜魂＞へと目を転じ、その中に様々の類像を見出す。そして特に差し当り＜精神＞mensのうちに見出される類像を彼は＜神の似像＞*imago Dei*と呼ぶ。⁽⁵⁾即自an sichとしての精神が認識notitiaを發出して対自für sichとなり、この両者を愛amorが結合してここに即且対自an und für sichの精神が現出する。即ち＜精神・自己認識・自己愛＞という三一性trinitasが見出される。精神とその自己認識・自己愛との関係は、基体subiectumと偶有accidentiaとの関係でもなく、全体と部分との関係でもなく、三つの実体の混合による一つの実体の存立というでもない。これら三肢は関係という観点から区別され、実体的に一なるものである。⁽⁶⁾

しかしこのような精神の三一性は抽象的原理論である。⁽⁷⁾我々の精神は具体的なたらきをしている。それ故我々は＜精神・自己認識・自己愛＞を＜記憶・認識・意志＞という三一性に換言する。何故精神が記憶に、愛が意志に換言され得るのか。先づ精神が記憶に換言され得るアウグスティヌスの根拠を見よう。アウグスティヌスは早くから記憶に就て関心を寄せ、回心（386年）翌年の「魂の大きさに就て」⁽⁸⁾に於ては、魂animaの力の無量性を明らかにするために記憶の問題に言及し、次で「音楽論」に於てはnumerus（リズム・ハーモニー・数）の種類とその序列を論じる第六巻で、感覚的なリズムの他に確実に不変のnumerus例えば詩作術や数学で言うnumerusも魂（但しこの場合mens）或いは記憶のうちにあるという。⁽⁹⁾更に親友ネブリディウスへの389年の返信に於てもほぼ「音楽論」と同様の記憶論を述べている。しかし「告白」第十巻に於てその記憶論は独自性と詳細さとに於て飛躍的な展開を見せている。そこで彼は可感的・物的なものから得たその似像及びこの再生像であるphantasmaそして学——これらの記憶の他に、魂としての自己の記憶と神の記憶を論じている。アウグスティヌスは記憶を世界と自己と神と——凡そ存在するもののすべてが何らかの形でそこに見出される＜場＞として把握する。「告白」第十巻は極めて注意深く順序立てて述べられている。先づ感覚を通じての似像の記憶、次にそれらを判断する学の諸規則の記憶、そしてその判断に於てなした魂自身の行為の記憶即ち自己自身の記憶に就て述べるという順序になっている。⁽¹⁰⁾自分の行為に於て自分は如何なる感情をもったか。それは知標notitiaとして記憶のうちにある。又忘却そのものも記憶は保っている。⁽¹¹⁾記憶を記憶する場合には、記憶そのものがそれ自体によって記憶それ自身に現在する。⁽¹²⁾ここで言う記憶は、感覚・想像・判断・行為・感情——要するに体験全体の直観的記憶のことである。そしてこのような記憶の観点が「三位一体論」にも受け継がれたものとしてそれを我々は＜精神＞と換言する。⁽¹³⁾愛が何故に意志に換言されるかに就ては、次章に両三一性の関係を詳論する際に明らかにされるだろう。

かくて即自としての記憶が全体として完全に外化して認識を生み対自となり、自己記憶と自己認識とを自己愛が結合してここに即且対自の精神の三一的構造が現出する。⁽¹⁴⁾自己記憶・自己認識・自己意志の三肢は、一つの生、一つの精神、一つの実体である限りに於て一である。これに対しそれらが相互に関係づけられる限りに於て三である。この三一性の三肢に関しては＜すべてがすべてのうちにある＞と言われる。即ち私は記憶・認識・意志を全体として同時に記憶し、

認識すること・意志すること・記憶することを全体として同時に認識し、意志し記憶し認識することを全体として同時に意志する。それ故これら三肢は時間上孰れが先とも言われないような根源的なものである。人はこの世に存在しはじめて以来同時に自己記憶・自己認識・自己意志をもちはじめたのである。たとえ我々が明晰にはそれらを意識しなかったにしても。⁽¹⁵⁾ このような自己の全体的記憶・認識・意志に於て、我々はその都度自己の同一性 *Identitat* を直観的に確かめてきた。自己の生の日々の雑多な多様性の根柢に、それを根本的に担う全体的・持続的・同一的なものがある。

ところで以上の三一性は精神の直観的自己認識に関するものである。しかし人間の＜魂＞と言われる生命は、決して確実に誤りなき直観的自己認識によってのみ生きているのではない。人間の魂はつねに肉体と結びついている。精神は比量的判断・想像・感覚の諸能力とつねに結びついてはたらいっている。このような人間の魂のうちには、神の似像とは言われないがしかし神の似像の反照とでも言わねば他の類像が見られる。⁽¹⁶⁾ 如何なるものか。先づ前述の記憶論で可感的イマゴ・フアンタスマの他に学或いは永遠不変の概念 *rationes* の記憶もあると言われた。然るに「三位一体論」に依れば、この永遠不変の概念は我々のうちにあるというより寧ろ我々（の精神）を超えていると言われる。⁽¹⁷⁾ 而もそうでありながら我々は何らかの仕方によって物的なものに就て判断するのである。このような *rationes* の内在と超越は如何なる関係にあるのか。我々は精神の全体的直観的自己認識の構造性格と反省的・形相的認識のそれとを明確に区別しなければならない。前者に於ては、認識の主体も対象も同一のもの即ち自己である。自己が自己を超越したりすることはあり得ない。ところが後者に於ては成程認識主体は精神であるが、判断されるもの及び判断がそれに基づいてなされるところの *rationes* と精神とは別のものである。別のものである限りに於て精神は判断の際自己から出て自己を判断の対象へ向け同時に判断の根柢へ向けねばならない。精神のこの両者へのこの超越に於て判断が成り立つ。而も判断は他ならぬ我々のもとで (*apud nos*) なされる。こうして我々は精神或いは魂の自己超越に於て可感的イマゴ・フアンタスマを自己のうちに取り込み、それに就て判断する *rationes* を我々のうちに現象させる。即ち魂の自己超越以前に於ては我々を超えて隠れていた *rationes* が我々のうちへ明るみへ出される——謂わば内なる内から、そこに於て即自にあったものが対自に置き戻される。⁽¹⁸⁾ 魂はこういうものの現象する場でもある。「三位一体論」で精神を超えている (*supra mentem humanam*) と言われた *rationes* は、この *rationes* の我々のもとへの生起現象に於てそれを成立せしめる＜根柢＞である現象してきた即ち記憶の野に現われ出てきた *rationes*＜概念＞或いは学はそこから消失し得る。しかし根柢としての *rationes* そのものは精神を超えて不変に止まる。こうして我々は神の似像の反照とでも言わねば類像を判断のうちに見出す。即ち魂のうちに現象しそこに刻まれた概念の記憶を即自とし、それを謂わば＜親＞とする＜子＞として外化し対自化する学的規則 *disciplina*、両者を結合する意志、これら三者によって成る或る種の三一性を見出す。しかしこの場合の三一性に見られる即自対自的構造に於ては、精神の直観的自己認識の場合と違い、対自は即自の完全な外化とは言われずど

こまでも即自のままのものが残される。何故なら判断者の目は一度にすべてのものを判断することはできず、つねに比量的でなければならず、こうして時間的規定を受けねばならぬからである。完全な対自として外化しないということから又この三一性は神の似像ではない。

次に、人間の魂のこの比量的判断は物的・可感的なものに就てなされるが、可感的事物に就て直接関わるのではなくて想像作用 *imaginatio* によって媒介されねばならぬ。感覚を通じて取り込まれるイマゴは想像を媒介として判断へと引き取られる。この想像はイマゴを再生するはたらきとして一般にしばしば人間と動物とに共通のものと見做されている。しかし動物と人間の想像のはたらきは根本的に違ふと考えなければならない。何故か。先づ人間の想像能力は単に再生能力に限定されない。媒介能力としてそれは判断能力と無関係ではないということが指摘されよう。動物の想像能力も人間のそれも共に感覚能力の受動作用の浸透を受けている。この限りに於て想像能力を見る限りそれは全く受動的なものに止まる能力でしかないだろう。しかし人間の想像能力はそれに尽きるものではなく、同時に上位の能力即ち判断能力の規制浸透を受けている。ここから次に人間の想像能力は感覚の受動作用と判断の規制作用の協働する〈場〉として特有な性格をもつに至る。アウグスティヌスは前述の判断の行われる〈場〉を固有には *mens* と呼ぶのに対し、このような想像能力を遂行する〈魂〉を固有には *animus* という言葉で表現する。⁽¹⁹⁾ 従って想像能力の特有な性格は又 *animus* と言われる〈魂〉の性格でもある。この能力の特有な性格とは、その対象——感覚を通じて取り込まれたイマゴを保持し続ける作用ばかりでなく、分離・結合・統一する作用、その対象へ向い超えようとする超越作用をもつということである。⁽²⁰⁾ この特性は又意志のそれでもあり、*animus* とは一言で言って意志的側面を濃厚にもった〈魂〉と言い得るだろうし、我々の意志の特性は想像力に於て余すところなくその姿を露頭する。このような人間特有の性格をもつ想像に於て我々は或る類像を見出すことができる。即ち感覚を通じて取り込まれたイマゴの貯えられている記憶を即自として、それを謂わば〈親〉とする〈子〉として外化し対自化した内的まなざし *visio interior*、両者を結合する意志——これら三者によって成る即ち対自的な三一性である。こういう三一的構造に於て我々が通常〈想像する〉というはたらきは成立している。これら三肢は成程一つの魂に属するものとして見出しはする。しかし明らかにイマゴと魂とは別のものであり、又判断の場合と同様、内的まなざしは決してこの記憶に含まれる全体を一挙に見ることはできず時間的規定のうちで移ろいゆかねばならないから、即自はどこまでも即自のままのものを残し完全な自己外化の姿で対自になることはなく、従ってここでは神の似像に於て言われたような〈すべてはすべてのうちにある〉ということは言われず、その三一性は何らかの類像ではあるにしても神の似像ではない。

人間の想像能力は上記のように判断能力の能動規制浸透を受け独自の作用性格をもつ。しかし逆に、想像能力である限り判断へイマゴを媒介する性格をもつものとしてどこまでも又感覚の受動作用の浸透を受けている。この感覚は肉官とも呼ばれ、物的・可感的事物との謂わば接点をなすものであり、肉体をもったものに固有のものと考えられるであろう。既に我々は動物のからだから我々のからだを区別して肉体と呼ぶ。この動物のものから区別された肉体に属する感覚も

又動物の感覚とは何らかの意味で異なるものであろう。人間に於ては、＜魂＞の諸能力の最下位に措かれる感覚のはたらきの場合ですら、これは魂の他の上位の諸能力から完全に独立にははたっているのではないと考えられる。丁度想像作用の場合に、上からの判断能力の能動規制作用と下からの感覚能力の受動作用とが同時に協働したように、感覚作用の場合にも、何らかの仕方で想像能力従って判断能力の能動規制作用と可感的事物による触発・受動作用とが同時に協働するものと考えられる。このような解釈によってアウグスティヌスの思想のうち二つの問題に照明を当て得ると思われる。即ち個々の感覚能力を統一する能力としての共通感覚の思想或いは感覚の自然的判断能力という思想と、魂による魂のうちへのイマゴの産出という思想とに根拠を与えると思われる。アウグスティヌスは先の「音楽論」でほぼ次のようなことを言っている。成程記憶のうちにイマゴが貯えられるためには可感的なものによって感覚が受動作用を受けるのでなければならない。しかし魂は肉体より優れたものであるから、魂が肉体から何かを受け取るのではなく、肉官の触発に於てより注意深く働くのである。⁽²¹⁾——これは正に我々の言う物体による肉官の触発及び上位の能力による能動作用の協働に於ける＜魂のうちへのイマゴの産出＞ということから解釈され得るものである。こういう固有の働きのなされる＜場＞として人間の感覚は把握されよう。こうして我々は感覚に於ける或る種の三一的類像を見出す。即ち感覚のうちのイマゴ、それを謂わば親とする子として対自化し外化するまなざし、両者を結合する意志或いは志向 *intentio*、これら三者によって成る三一性である。普通に＜感覚する＞という働きは、こういう構造に於て成り立っている。勿論この三一性も似像の弱い反照に過ぎず神の似像とは言われない。

他方我々は又どこまでも人間の能力の範囲を逸脱する世界の存在、即ち神によって創られそれ自体で存立する物体的事物の世界の存在を認めない訳にはいかないものであって、この世界自体は我々の能力によって産出されるものではない。そしてこのような存在によって感覚は何らかの仕方で触発受動作用を受けるのであり、この時我々は物体的事物、まなざし、志向の三者による三一的類像を見出す。⁽²²⁾ 動物もこのような物体的世界のうちに存するものであり我々と同じく物体による受動作用を受けているであろう。その限り又動物の感覚の場合にもこのような三一性は見い出されるかもしれない。しかし動物の場合には感覚能力或いは或る種の想像能力しかないとすると、我々の感覚の場合のように＜魂による魂のうちへのイマゴの産出＞というような事態は見られないのではなからうか。

〔 2 〕

我々は以上に於て神のうちへの発出即ち三位一体なる神の現出と、このような神の外への発出即ち創造とを論じ、この創造になる被造物のうちでも特に人間が神のイマゴとして創られたこと、そしてそのイマゴの所在は差し当り *mens* であり、このイマゴの謂わば反照として人間の＜魂＞と言われるものの諸能力の様々の三一的類像が見い出されることを論じた。

我々は今度は逆に我々の側に最も身近かなもの即ち物體的なもの或いはそれと接点をなす肉官の観点——前章の最後に述べられた観点から出発しよう。アウグスティヌスの所謂＜内面への道＞

＜魂の訓練＞²³ と呼ばれる道を迂るのである。これによって我々は神の似像 *imago Dei* に関する新たな視点に到達するであろう。既述のように人間は魂とともに肉体をもって生きている。このような人間の魂は決して純粋な *mens* ＜理性的精神＞として生きているものではない。人間の＜魂＞と言われるものは感覚・想像・判断の諸能力の協働に於て一つの生命を構成している。感覚に於ける三一性。想像に於ける三一性。判断に於ける三一性——これらは現実には純粹に独立に成り立つものではなく、つねに魂全体の諸能力の協働に於て成り立つものである。想像といってもそれは、既に感覚の触発を通じて物的なもののイマゴが魂のうちに取り込まれるのでなければ働かない。即ち可感的事物による感覚の触発を通じて成立する＜物的事物・外的まなざし・志向＞或いは＜感覚のうちにある物的事物のイマゴ・まなざし・意志の志向＞という三一性に於て取り込まれる物的事物のイマゴが、想像に於て成り立つべき三一性の第一肢即ち（感覚的）記憶の位地に措かれ、こうして＜記憶・内的まなざし・意志＞という三一的構造が生じる。この想像を媒介として、感覚に於て取り込まれたものが判断の対象になる。想像に於て保持されるものが判断の三一性の第一肢即ち概念の記憶に包摂され、こうして＜概念の記憶・学的規則・意志＞という三一的構造が生じる。想像は感覚を、判断は想像を従って感覚をも前提してはじめて成り立つのである。しかし逆に、判断能力の想像能力への浸透、想像能力の感覚能力への浸透ということが言われうるのであり、我々が＜感覚する＞というときにすら想像能力・判断能力が何らかの仕方で協働していると言われるだろう。少くももの言ひ語らう人間に於ては純粹に感覚するということは考えられないのではなからうか。このような謂わば下からの受動作用と上からの能動作用とが渾然一体分ち難く協働して、ここに我々が＜魂＞と呼ぶものの全体的機能が果されている。そして我々が一般に＜感覚する＞という場合には、魂のこの受動的側面が端的に表面に現われているのであり、＜判断する＞という場合には、その能動的側面が端的に露顕しており、＜想像する＞という場合に、この両側面が同時に端的に協働の姿をとって現われている。

ところで、以上の魂の能力はどこまでも形象的・比量的能力に止まる。能力とそれの向う対象とは飽くまでも別のものである。対象の多様性に於てその能力もまた多様性のうちへ移り出てゆかねばならない。魂のこの自己超出に於て以上の種々の即且対自的三一性が生起するが、魂がそれへと超出する対象の雑多な多様性のために、これに於てその三一性も多様に変化推移しなければならない。そしてこのような魂の謂わば根柢に、多様性のうちへ解消されない＜精神・認識・愛＞即ち＜記憶・認識・意志＞という精神の直観的全体的自己認識の即且対自的三一性があるのである。この三一性に於ては主体と対象とが全く同一であり、魂或いは精神は自己超出すべき如何なる対象ももたない。対自は即自の完全な外化であり三肢は＜すべてがすべてのうちにある＞。では二種の表現で言われるこのような精神の直観的自己認識の三一性の関係は如何なるものか。全く同一の内容を言葉を換えて表現したものなのか。或いは別々に神の似像が二種あるのか。この両三一性の関係に就てアウグスティヌスは直接には語っていないため、古来それに就て多くの議論がなされてきた。²⁴ 我々の解釈は既に前章に一応示されている。＜精神・認識・愛＞という三一性は抽象的原理論であり、＜記憶・認識・意志＞という三一性は＜精神＞の具体的な

はたらきの側面から見られたものであり、その限りに於てこの両三一性は異なるものと言わねばならないだろう。しかしそれだからといってどうして二種の別々の神の似像があると言われるであろうか。アウグスティヌスは原理論として述べられた神の似像を現実的なはたらきに即して述べたのであり全く同一の神の似像に就て論じたのである。その際何故に＜精神＞の代りに他の能力がではなく特に＜記憶＞が措かれ得たのか。そのアウグスティヌスの根拠は前章に述べた通りである。ここで我々は両三一性の関係に就ての我々の視点の正当性を更に検討しなければならない。而も両三一性が夫々述べられる「三位一体論」第九巻・第十巻に限定して両者の関係を見るのではなく、「三位一体論」全体に於けるそれらの位地。特にこれらに続く十五巻迄の内容を考慮して論じなければならない。或る論者はこのような視点を見落したために誤った解釈に陥ったように思われる。扱。第十巻に述べられる＜記憶・認識・意志＞という三一性は再び第十四巻に於て論じられる。そこで彼はこの三一性を精神の自然的自己の＜記憶・認識・愛＞⁽²⁵⁾と呼んでいる。第十巻の三一性はこのような三一性であったのである。自然的とは、意識されようがされまいが、人間が人間として存在する限り如何にしても失うことのできない——人間存在そのものを根柢から成立せしめる規定として具わっているということである。⁽²⁶⁾そして彼がここで＜意志＞を＜愛＞amorと言い換えていることに注意しなければならない。意志はつねにその向うべき対象をもたねばならず⁽²⁷⁾それを求めている限りに於て欲求appetitusと言われ、それを得ている限りに於て愛と言われる。⁽²⁸⁾＜意志＞という規定は現実的なはたらきの一般的規定であり、精神の自己意志は既にその対象（自己）をつねに得ているのであるから＜愛＞と言われる。＜精神＞の位地に＜記憶＞が措かれ得るといこと、＜意志＞が実は＜愛＞amorを含意していたといこと、このことから、我々は第九巻及び第十巻の両三一性の関係に就ての上述の観点の正当性を確かめることができるだろう。

両三一性は原理論・具体的作用論の相違はあるが、同一の神の似像に就て言われたものであり、人間が意識すると否とを問わずその全体的直観的認識に於て根本的に成り立っているものである。ところが、繰り返すが、人間は純粹にこのような直観的自己認識に於て生きているのではなく、つねに同時に魂の他の諸能力との協働に於て生きている。さればこそ又通常この直観的自己認識は隠されたままである。即ち魂の能力は先づ感覚を可感的事物によって触発されるのでなければならず、こうして取り込まれるイマゴが想像作用に託され、ここに媒介されたものに就て判断し、或る者は自己の魂をこのイマゴと混同し、これをすら物體的な何ものであると見做す誤謬に陥る。⁽²⁹⁾人間の魂はその機能を果すために先づ以て物體的なものによって触発されねばならぬという宿命のために、不断に物體的なものへと自己超出せねばならぬ。こうして人間は次第に自己忘却へと陥ってゆく。＜汝自身を知れ＞と言われるとき、この自己忘却からの脱却が命じられているのである。アウグスティヌスは＜外から内へ＞という内省の道によって自己自身に到達する。そしてこの自己自身が上記の三一的構造に於て存し、これは仮令意識されなかったとしても我々の存在のはじめよりして我々の存在の根柢に具わっていたものである。しかしアウグスティヌスの場合、この＜自分自身を知る＞ということは単に精神の直観的自己認識をもつということに尽

きるのではなく、宇宙に於ける人間存在の定位の自覚をも含意する。即ち自己が下属すべきもの（神）の下に、自己が支配すべきもの（物的世界）の上に、規定されることを欲するという意志規定も含意する。⁽³⁰⁾ 精神は自己を物的なものと思い込み自己忘却に陥る傾向性をもつ。このような自己忘却を脱却しても、しかし神を忘れるならばより以上の自己忘却に陥るだろう。従って＜記憶・認識・意志＞という精神の自己自身の三一性が神の似像と言われ得るのは、それが今言った宇宙に於ける人間存在の定位の自覚に於て成り立つ可能性をもつものだからである。⁽³¹⁾ しかし又もし精神が神を愛する可能性をもったまま現実に神を愛するものでなければ決してその三一性すら真実には三位一体なる神の似像とは言われないだろう。従って真に神の似像と言われる三一性は＜記憶・認識・愛＞に於て見出される。但しここで言う＜愛＞は固有には dilectio のことである。アウグスティヌスは＜愛＞を表わすものとして先程の amor の他にこの dilectio、そして charitas という言葉を使う。amor は広義の概念で、物的なものに関する＜愛＞、自己＜愛＞、神の＜愛＞、これらの孰れにも使う。しかし固有には、物的なものへの愛、そしてその限りでの愛及び単なる自己愛を彼は cupiditas と呼び、神の愛を dilectio 或いは charitas と呼ぶ。⁽³²⁾ 第九巻・第十巻に述べられる三一性の＜愛＞ amor はどこまでも自己愛に止まるもの、しかし又どこまでも神の愛の可能性をもったものとして考えられる。そして現実に神を愛するときに＜記憶・認識・愛 (dilectio)＞という神の似像たる三一性が見出されるのである。アウグスティヌスが第十四巻に於て精神の三一性に関して＜memoria, intelligentia, voluntas, sive amor, vel dilectio＞という表現をするとき、⁽³³⁾ 以上のような観点が予想されているであろう。＜sive＞, ＜vel＞は単なる言い換えではない。意志は対象をもち、その可能対象は物的なもの、自己、神である。その可能対象をもち得るものとして意志は又愛 (amor) とも言われよう。しかし既に神を現実に愛しはじめたときに意志は固有には dilectio と言われるのである。神の愛の可能性をもったものとして＜memoria, intelligentia, voluntas, sive amor＞という三一性も神の似像と言われうる。しかしこの神の愛はどこまでも可能性でありその意味で即自的であり全体としてこの三一性は即自的である。アウグスティヌスが nosse の段階での意識に於ける精神の三一性を論じるときこのような即自的なものが考えられており、そしてその愛の対象は専ら自己であり、cogitare の段階での意識に於ける三一性を論じるとき＜memoria intelligentia dilectio＞という謂わば対自的・自覚的なものが考えられており、その愛の対象は専ら神である。⁽³⁴⁾ ここで言う＜対自的＞とは、既に宇宙に於ける自己の定位を自覚する意識——物的なものの上に、神の下に自己を定位して生きる意識のことである。そしてこの限りで即ち神のために物的なものを、自己を愛するならばそれは決して cupiditas とは言われない。自覚的精神にとっては、凡そ存在するもののうちで捨てるべき何ものもない。従って自覚的意識に於ては人間は肉体をもったままの全的人間として神の似像と言われうるのである。我々は前章に神の似像の所在を差し当り＜精神＞mens として論じた。しかし今や物的世界に関わる魂の諸能力一切を内包したままの即ち肉体をもったままの人間が神の似像と言われるだろう。⁽³⁵⁾

しかしこの＜対自＞もまだ完全なものとは言われまいだろう。何故なら、この定位の自覚のうちには又人間は「我は在りて在るもの」と言う無制約的創造者によって創られたものであること、正にそれ故に制約された存在 *esse* しかもたず、存在そのものである神とは存在上の無限の距離をもつこと、このような自覚が含意され、従ってこの自覚は、不断に神への自己超出を続け自己を創造してゆくダイナミックな運動に於て深められてゆかねばならぬからである。実際、この自覚の三一性に於てもまだ神は完全には（トマス的に言えば本質によつては）記憶されておらず、従って完全には認識外化されていず、完全には愛されていない。即ち神が記憶し認識し愛するが如くには記憶し認識し愛してはいない。それ故この世に在る限り人間は、自己の自己たる所以——神のイマゴたる所以を全的に対自化することはできない。かくて人間は不断の自己超出に於て即自・対自・即且対自の謂わば円環的自己創造に於て自己を展開しなければならない。⁽³⁶⁾ 我々はこの運動の総体を＜歴史＞と呼ぶうだろう。そしてこの運動の終局に於て完全に即且対自の、それこそ正に神のイマゴと言われる三一性＜*memoria Dei, intelligentia Dei, amor sive dilectio Dei*＞⁽³⁷⁾——既に宇宙のはじめから神のうちにあり、それから我々人間が神のイマゴとして創られ、それによって我々がイマゴとして保持せられ、それを我々が求めそれを目指して生きていたもの——そういう（イデアとしての）イマゴに還帰するだろう。

〔注〕

(1) *Bibliothèque Augustinienne* 16の補注によれば、アウグスティヌスを「三位一体論」執筆へと駆り立てた動因は「告白」第十三巻から看取しうろという。彼はそこで三位一体とその似像としての人間精神を論じており、これが又「三位一体論」全巻の素材でもある。我々も又「告白」特にその第十三巻と「三位一体論」との重要な関連を認める。「告白」が遅くとも401年には完成し、399年夏に「三位一体論」が始められたという年代的連続性だけでなく、アウグスティヌスは確かに「告白」第十三巻で三位一体とその似像としての精神とを創造論と還帰論の両側面から論じており、これが又「三位一体論」のテーマでもあるからである。特にその際注意すべきことは、彼が＜神の似像＞の所在を＜精神＞*mens*としながら、これを＜理性的精神＞の意の他に、と言うよりその意味と同時にパウロの屢々使う＜靈的精神＞の意に使っているということである。我々は神の似像の所在としての人間の*mens*を＜理性的精神＞であると同時に＜靈＞として把握せねばならない。このことは「三位一体論」第八巻（～第十五巻の理解にとって見逃し得ぬ視点であるばかりでなく、彼の全体系の理解に不可欠の視点でもある。我々は一応順序として〔1〕に＜理性的精神＞の意での*mens*を、〔2〕にこの意をも包摂した意味での＜靈的精神＞を論じる。

(2) *De Trin.* v. 13.14.

(3) *De Trin.* v, 5, 6～7, 8

(4) 例えば *Epistola* 2, 3＜*esse, species, manentia*＞, *Confessiones* xiii, 2, 11＜*esse, nosse, velle*＞など。

- (5) De Trin, lx. 12, 18.
- (6) De Trin, lx, 4, 5~5, 8
- (7) ibid. lx, 2, 2. Auferamus enim ab hac consideratione caetera quae multa sunt, quibus homo constat: atque ut haec quae nunc requirimus, quantum in his rebus possumus, liquido reperiamus, de sola mente tractemus.
- (8) De quantitate animae, 5, 8
- (9) De musica, vl, 4, 6~7, 18; vl, 18, 34.
- (10) Confessiones, x, 13, 10.
- (11) 感情の記憶 ibid x, 17, 26. 忘却の記憶 ibid x, 16~24, 25.
- (12) ibid. x, 15, 23~16, 24.
- (13) アウグスティヌスはこの換言に就てただ青年の能力を検べる場合に普通これを検べるからとしか言っていない。しかし我々はその換言の根拠をこのように解する。
- (14) 三肢の作用性格は順に、自己保持、自己意識、自己統一作用として規定されうるだろう。
- (15) De Trin, x, 5, 7.
- (16) De Trin, xl~xll, 3, 3
- (17) ibid. vl, 9, 13: lx, 6, 10: xll, 2, 2.
- (18) Confessiones, x, 10, 17~11, 18.
- (19) しかし、想像能力のうちでは感覚の受動作用と判断の能動規制作用とが協働するから、その両作用を担う animus のうちで判断が行われると考えられることもある。ここから学的規則の所在を時に animus であるとするアウグスティヌスの思想が理解される。一般に彼は anima, animus, mens 更には Cor, spiritus などの人間の内面を表わす言葉が無差別に使っているのではない。それらは固有の意味と重複する意味をもっている。それが如何なるものか論証し得るが機会を改める。
- (20) 統一性 Confessiones, x, 8, 13; 持続性 ibid. x, 8, 14: x, 13, 20: x, 25, 36; 自発性 ibid. x, 8, 12~18 特に x, 19, 28 の想起に就て。超越性 ibid, x, 25, 36; 参照
- (21) De musica, vl, 4, 7; v, 5, 9
- (22) 三位一体に於ける御子は御言葉 verbum とも言われ<完全な似像>とも言われる。この<完全な似像>によって万物は創造されその限り被造物はその反照として<不完全な似像>としてある。精神は<不完全な似像>のうちでも最上位のものであり、又その反照として魂の他の諸能力も何らかの類像としてあり、魂が全体として<不完全な似像>と言われよう。物的被造物も何らかの類像であるから、魂が物的被造物によって触発されそのイマゴを取り込むときこのことが可能であるのは魂も物的被造物もともに神の類像に創られているということに根拠があるだろう。従って存在根拠とともに認識の根拠も神の創造にあるだろう。アウグスティヌスが<

創造者の配置による精神と可知的事物の対応>による認識と言うとき (De Trin.xll, 15, 24)、このような事態が考えられているであろう。ここから又<創造者の配置による感覚と可感的事物の対応>による認識ということも言われうるだろう。

(23) Confessiones, xlll, 11, 12.

(24) St, Thomas ; De veritate, qlo. a. 3 ; M.Schmaus ; Die-
psychologische Frinitätslehre des hl. Augustinus, s.252 ; E.
gilson ; Introduction á l'étude de saint Augustin. P293.

(25) De Trin.xlv, 14, 19, non tamen in his tantis infirmitatis
et erroris malis amittere Potuit naturalem memoriam,
intellectum, et amorem sui.

(26) ibid. xlv, 4, 6及び前注参照

(27) ibid. x, 10, 13.

(28) ibid. lx, 9, 14 ; lx, 12, 18.

(29) ibid. x, 7, 9~8, 11.

(30) ibid. x, 5, 7.

(31) 注 (25) (26) 参照

(32) De Trin lx, 7, 13.

(33) ibid xlv, 12, 10.

(34) ibid. x, 5, 7 ; xll, 5, 7.

(35) ibid. lx, 12, 13.

(36) ibid. xlv, 12, 15 ; xv, 20, 39~.

〔哲学（西哲史）博士課程二回生〕